

渋沢栄一アンドロイド講義の内容

「仁義道德」と「生産殖利」つまり、「道德」と「経済」とは、共に両立して進むべきものでございます。

にもかかわらず、多くの方は儲けに走り道德心を忘れてしまう傾向にありますので、昔の偉人は、このことを人に教える際に、道德を説き、お金儲けを戒めることに専念いたしました。

ところが、後の学者はこれを誤解して、お金儲けと道德は対立するものとし「じんすなわちとみならず 仁 則 不 富。とみすなわちじんならず 富 則 不 仁。」と考え「利を得れば義を失い、義に依れば利が離れる」、つまり「儲けに走れば道德を忘れ、道德を重視すれば利益が薄くなる」と速断してしまい、ついには「貧しいことが清く美しく、富むことは汚れることだ」などと、偏って論じられるようになってしまったのであります。

しかし、私が尊敬する孔子の教訓には決してこのような意味はありません。孔子は道德に反した利益は良いことではないと戒めてはおりますが、道德にあった利益はこれを理に適うものとしています。孔子が富むことをいやしんだのは、不義の場合に限っていることであり、道德に適った利益は、君子の行いとして恥じる所でないとしたのは明らかであります。

私が聞くところによれば、経済学の祖であるイギリス人「アダム・スミス」は「グラスゴー」大学の倫理哲学教授であって、有名な「国富論」を著わして、近世経済学を起した人ですが、孔子の考えと同じであります。このため、道德・経済合一は東西問わずの世界中に適する不変の、いつまでも変わらない原理であると、私は信じます。

また、孔子が弟子の子貢しこうの問に対して答えた「博く民に施して、能く衆よを済しゅうう」という言葉からも、国を治める者にとって、利益を生み出す経済活動は決して疎かには出来ない事である、と私は堅く信じておるのであります。

私は学問も浅く不勉強ですので、実行できることも微力ではありますが、ただ、道徳と経済とは、全く合一するものであるということを確認しております、私が行なう事業においてもこれを証明していけると思っております。これは決して今日になって言い出したことではありません。

自分の思いが、正しい国家の隆盛を望むならば、国を富ますということに努めなければなりません。そして、国を富ますためには科学を進め、商工業の活動も進めていかななくてはなりません。そこで、商工業を進めるためにはどうしても「合本組織」いわゆる株式会社の組織が必要であります。そして、株式会社の組織をもって会社を経営するには、完全にして強固なる道理によって行わなければなりません。そして、道理によるならば、その基準は何になるかと申しますと、これは孔子の「論語」による外はないのです。

ゆえに不肖ながら私は、「論語」によって事業を経営してみようと考えまして、これまで「論語」を論ずる学者が道徳と経済とを別物にした考えは誤りであり、必ず一緒になし得られるものであると、こう心に決めて数十年間経営しましたが、大いなる過失はなかったと思うのであります。

さて、世の中が進歩するに従って社会もますます発展してきました。しかし、それに伴って肝心な道徳仁義という考えも共に進歩してきたかという、残念ながら「進歩していない」と答えざるを得ません。逆に大きく後退したことが無きにしもあらずといえます。このことは決して国家にとって良いことではありません。国家は国民が富むことさえできれば、道徳が欠けても仁義が行われなくとも良い、と言う人は誰もいないと思います。そんな極論がまかり通れば、次第に社会生活の様々な事柄が上手くいかなくなってしまうと想像するのは、誰でもわかることですし、その実例は世界中に余りに多くございます。

このように考えて参りますと、今日、「論語」を基本にした私の主義である「道徳経済合一説」がいつの日か広く世の中に普及し、みなさんの考えとして社会に受け入れられる様になることを大いに期待するのでございます。

【「道徳経済合一説」大正12年（84歳）】